

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月18日現在

機関番号：11301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22830016

研究課題名（和文） 自閉症スペクトラム障害者の自己に関する研究—自伝的記憶メカニズムの解明—

研究課題名（英文） A Study of the concept of the self in people with autistic spectrum disorder

研究代表者

滝吉 美知香 (TAKIYOSHI MICHIKA)

東北大学・大学院教育学研究科・博士研究員

研究者番号：00581357

研究成果の概要（和文）：

自閉症スペクトラム障害者における自己の確立を支援するという立場から、自伝的記憶が形成される過程の中でも特に、他者との関係性の中での体験や心情の理解が反映される場面の想起として、「気まずさ」場面に着目した研究を行った。小学生から成人までの定型発達者および自閉症スペクトラム障害者を対象に調査を行い、自由回答をカテゴライズして分析し、自閉症スペクトラム障害者ならではの「気まずい」体験または心情の想起について検討した。

研究成果の概要（英文）：

People with autistic spectrum disorder (ASD) and normally developing people participated in interviews to express their experience of feeling awkward, embarrassed, or uncomfortable (called "KIMAZUSA" in Japanese). The present study aimed to investigate how the people with ASD recall their experiences and emotions in relation with others, create meanings of them, and construct their autobiographical memories.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,060,000	318,000	1,378,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,260,000	678,000	2,938,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：特別支援教育

キーワード：自閉症スペクトラム障害, 自己

1. 研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム障害 (Autistic Spectrum Disorder; 以下 ASD と略記) 者は、対人的相互反応やコミュニケーションに質

的な障害がある (APA, 2000) ことから、他者との関係性の構築や維持に困難を示す。そのため、本来、社会的な経験や活動の過程において他者と関係を形成することによって発達する自己 (Mead, 1934) のありように

も特異性を示す。特に、思春期・青年期の ASD 者が、自分自身の異質性について不安や疑問を感じること (Kanner et al., 1972 他) や、自己の存在意義を見出せない悲しみや苦悩を抱くこと (Williams, 1992 他) が指摘されてきた。よって、ASD 者がどのように他者との関係性の中で自己を確立するかをとらえ、彼らへの支援を考えることが今日急務である。

そのような ASD 者がどのように自分自身を理解しているのか、また、彼ら・彼女らに対して自己の形成を促進する心理臨床的支援方法について研究をすすめる中、ASD 者が自分自身の過去の体験や出来事を想起する場面に多く立ち会ってきた。そのような中で、ASD 者には、そもそも自己を形成するための体験を記憶・想起する際の特異性があるのではないかという疑問が生まれ、今回の研究において ASD 者の自伝的記憶の側面に着目するに至った。

2. 研究の目的

本研究にて着目する自伝的記憶は、「主体的・個人的な体験の記憶であり、体験したときの心的状態の記憶を含む」(Wheeler et al., 1997) ものである。このような記憶が基となり、自己についての理解が進むと考えられるが、自伝的記憶およびその想起に特異性があることは、そこから出来事や体験を解釈し総括して自己を概念化する作業にも影響すると考えられる。

ASD 者の自伝的記憶に関する先行研究ではこれまで、記憶そのものの歪みや被暗示性は大きくないものの、記憶の想起自体が少ないこと (Bruck et al., 2007) や、ASD 者の記憶の内容には視覚的イメージが多く含まれること (Hulbert et al., 1994)、さらに、言語という手段により彼ら・彼女らの自伝的記憶に関する表現が制限されていること (Boucher, 1981 ; Boucher & Lewis, 1989) などが指摘されてきた。

しかし、現在の自己の形成に関わる彼ら・彼女ら自身の自伝的記憶について、他者との関係性という視点からどのように記憶されているものなのかを検討した研究は見当たらない。前述のように、他者との関係性に困難を示す ASD 者であるからこそ、彼ら・彼女らが他者との関係性をどのようにとらえ、それをどのように自己に反映させているのかをふまえた支援を考えていく必要がある。そのためにはまず、他者との関係性の中での自己の体験や心情の想起に着目することが必要である。

以上より、ASD 者がいかに他者との関係性の中で自分自身の体験や心的状態を記憶しているかという視点から、調査を行うことと

する。ASD 者の自己理解の特徴として、他者との相互的な関係性の中で自己を否定的にとらえやすい傾向 (滝吉・田中, 2011) が指摘されている。よって、他者との関係性の中での体験や心的状態が、現在の自分に対する理解として反映されやすい場面として、他者との間の微妙な空気や雰囲気を読むことが要求される「気まずさ」に着目する。「気まずさ」は、他者との関係性やそのとき自分自身がおかれた状況によって多様に変化する。特に、コミュニケーションに異質性が指摘される ASD 者にとっては、独特の場面解釈がされている場合が多いことが予想される。ASD 者が自身の気まずい体験や心的状態をどのように記憶し表出するのか検討することは、彼ら・彼女らが他者との関係性の中で自伝的記憶を創造していくプロセスについての一つの見解を示すことにつながるであろう。

3. 研究の方法

(1) 対象者

①定型発達群

小学生 27 名、中学生 383 名、高校生 98 名、大学生以上 29 名の計 537 名。

②ASD 群

ASD 者 22 名 (小学生 1 名、中学生 1 名、高校生 10 名、高卒以上 10 名) (平均 VIQ93, PIQ84, FIQ87)

(2) 手続き

「あなたが“気まずい”と感じるのはどういときですか?」「そのときの体験や気持ちをできるだけ詳しく教えてください」という質問への自由回答を、面接または質問紙で求めた。ASD 群はほぼ全員が面接であった。定型発達群においては、質問紙への回答内容を調査者が詳しく聴取する形で、可能な限り面接を行うようにした。回答数に制限はなく、自由に思いつくことをすべて答えてもらった。

(3) 分類方法

まず、定型発達群の回答について、斎藤 (2009) に基づく 10 カテゴリーを用いて分類を行った。評定者 2 名の一致率は $\kappa = .57$ であり、分類の不一致や不明の回答については、改めて分類枠を見直し精緻化を行った。その結果、837 個の回答が 12 のカテゴリー (Table 1 参照) に分類された。次に、それらの 12 カテゴリーを用いて、ASD 群において得られた 53 個の回答を分類した。評定者 2 名の一致率は $\kappa = .90$ であり、不一致については協議を行い分類を決定した。分析に関しては、両群の結果を用いて比較を行った。

Table 1 「気まずさ」に関する 12 のカテゴリ

A	字義通り	言葉通りに受け取る・受け取られる(「何回言ったらわかるの」と言われて「覚えてないのでわかりません」と答える)
B	雰囲気を乱す	同調しない、話に割り込む(試験の難しさがテーマになっているときに「簡単だった」と言う/唐突に話に割り込む)
C	失言・意地悪	周囲にとって不利益をうむ言動(無意図・意図的にかかわらず、肌が黒いことを気にしている人に「肌が黒いね」と言う)
D	不都合	不都合なことがばれる・ばれない(名前を思い出せない相手と話し続ける/嘘がばれる)
E	道徳	道徳的でない言動(バスの中で「譲り合いの席」に座る/目上の人に敬語を使わない/順番を守らない)
F	想定外の言動	失敗、すべる、一人だけの言動(ギャグを言ったのに突っ込まれない/深刻な場面に明るく入ってしまう)
G	他者の存在	親密性のない他者との空間共有、言動や外見の同質・異質性(初対面の相手と会話が続かない/偶然同じ服を着ている)
H	ネガティブ感情	怒りや悲しみなどネガティブな感情への遭遇(友達泣いている/先生が怒っている)
I	関係性	認知的不協和、多面性の不調和(友人Aが「友人Bと仲良くしないで」と言ってくる/家族との外出先で友達と会う)
J	感情のズレ	気持ちと言動のズレ(本当は心配していないのに心配だと書かれる/格好よくないのに格好いいと思いついて)
K	性・恋愛	性的な対象への注目、恋愛感情を含む関係性(家族でテレビを見ているときキスシーンがある/友達とその彼と一緒に帰る)
L	図々しい	図々しい(無遠慮/物おしせず要求をつきつける)

4. 研究成果

(1) 定型発達群

年齢群とカテゴリで 4×12 の分割表を作り、Fisher の直接法を行ったところ、有意差が示された ($\chi^2(1) = 281.53, p < .001$)。結果を Table 2 に示す。

Table 2 定型発達群における分析結果

	小学生	中学生	高校生	高卒以上
A 字義通り	0(-0.6)	2(-0.5)	2(1.2)	0(-0.5)
B 雰囲気乱す	3(-4.9)**	219(8)**	30(-5.8)**	13(-0.2)
C 失言・意地悪	7(-0.7)	86(2.9)**	16(-2.7)**	5(-0.4)
D 不都合	5(5)**	1(-3.5)**	4(1.2)	0(-0.7)
E 道徳	5(0.8)	4(-2.9)**	14(1.9)	13(1.7)
F 想定外の言動	24(2.3)*	126(-0.8)	45(-0.8)	12(0.5)
G 他者の存在	2(-1.9)	27(-5.7)**	48(8)**	3(-0.6)
H ネガティブ感情	17(7.2)**	15(-4.9)**	17(1.8)	0(-1.7)
I 関係性	1(0.1)	3(-2.8)**	5(1.5)	3(3.1)**
J 感情のズレ	3(1.4)	10(-0.7)	3(-0.7)	2(1.2)
K 性・恋愛	0(-1.4)	4(-4.2)**	17(6.2)**	0(-1.1)
L 図々しい	0(-1.4)	21(3.2)**	0(-2.7)**	1(-0.1)

* $p < .05$, ** $p < .01$
※ () 内は調整済み残差

①小学生

ホフマン(2001)によれば、児童期は、他者に起きたことへの共感的反応として自分の感情を理解し始め(6~7歳)、他者の感情がその人の最近の経験に影響されることを理解し始める(9~10歳)時期である。このような感情認知の発達段階が、「ネガティブ感情への遭遇」を気まずいと感じることに影響していると考えられた。つまり、他者が怒りや不安などのネガティブな心的状態にあることへの気づきが、自分自身の怒りや不安につながり、そのような気持ちを気まずさとして認識していると考えられる。

また、嘘がばれるなどの「不都合」な状況や、失敗などの「想定外の言動」に直面した場面についても、小学生は気まずさを感じやすいことが明らかにされた。このことは、恥

の意識と関連が深いと考えられる。埜・小松(1999)によれば、児童期は、学業に関する失敗、教師の叱責、他者からの注目などを恥と感じやすい傾向にある。そのような場面での恥の意識の感じやすさが反映された結果といえる。

②中学生

中学生は、「雰囲気乱す」「失言・意地悪」「図々しい」などの場面に関する言及が多く示された。田中(1984)は、交友活動の発達的変貌に関して以下のように指摘する。小学生の段階では、仲良し集団に仲間として受け入れられることで満足するのに対し、中学生の段階では、自分の不安な心理状態に対応してほしいという内的欲求が受け入れられることで満足する。このことから、中学生は、友人との心理的つながりを求め、「仲間」「集団」としての言動に重要性がおかれやすいといえる。よって、他者との調和を見出す行為としての、「雰囲気乱す」「失言・意地悪」「図々しい」などの行為に「気まずさ」を感じやすいと考えられた。

③高校生

高校生では、「他者の存在」「性・恋愛」に関する言及が多くみられた。落合ら(1993)によると、高校生は、物理的な生活空間の広がりとともに、接触する人間関係の拡大、および、異性への興味関心と実際の体験(恋人関係やデート経験など)割合が高まる時期である一方、孤独を感じやすい時期である。異性への興味関心が高まることで「性・恋愛」に関する「気まずさ」を認識しやすくなると考えられる。また、全体的に人間関係に敏感になることで「他者の存在」に関する「気まずさ」を認識しやすいものと考察される。

④高卒以上

大学生や一般社会人を対象としたこの年齢群では、「関係性」についての言及が最も多く示された。他者との複雑な「関係性」が絡み合った状況の中で起こる感情を認識することで「気まずさ」を感じるといえる。つまりは、メタ認知的な共感が可能になる成人期(ホフマン, 2001)ならでは「気まずさ」であるといえるだろう。

(2) ASD群

ASD者および定型発達者の回答数について、障害の有無、年齢群(高校以下・高卒以上)、カテゴリの 2×2×12 の分割表を作り、対数線形モデル分析を行った。その結果、障害の有無 ($\chi^2(1) = 4.23, p < .05$)、年齢群 ($\chi^2(1) = 10.67, p < .01$)、カテゴリ ($\chi^2(11) = 124.18, p < .001$) の各主効果が有意であった。さらに、年齢群とカテゴリ ($\chi^2(11)$)

=109.90, $p < .001$), 障害の有無とカテゴリ
 $(\chi^2(11) = 45.18, p < .001)$ の各交互作用も
 有意であった。障害の有無とカテゴリの交
 互作用を Table 3 に示す。

Table 3 障害の有無とカテゴリの回答数との関連

カテゴリ	内容(ASD者の回答例)	定型	ASD
A 字義通り	言葉通りに受け取る・受け取られる(回答なし)	4(-)	0(+)
B 雰囲気乱す	同調しない、話に割り込む(家の中が静かで話にくい／知らない人 に注意をしている人を見て気まずい気持ちになった)	265 (0.80)	7 (+0.80)
C 失言・意地悪	周囲にとって不利益をうむ言動(嫌なことをしてくる人と一緒にいる)	114 (0.76)	3 (+0.76)
D 不都合	不都合なことがばれる・ばれない(簡単な仕事だと言われたのに聞 違ってしまったとき言いにくい／説明がわかりにくいとき聞き返せない)	10 (+1.06)	10' (1.06)
E 道徳	道徳的でない言動(挨拶をしたのに返してくれない)	35 (0.72)	1 (+0.72)
F 想定外の言動	失敗、すべる、一人だけの言動(思い出し笑いを指摘された／自分 だけ観子によって興奮して喋りすぎた)	207 (0.29)	14 (+0.29)
G 他者の存在	親密性のない他者との空間共有、言動や外見の同質・異質性 (しばらく会ってない人と会う／初対面の人と会話がかたない)	80 (0.16)	7 (+0.16)
H ネガティブ感情	怒りや悲しみなどネガティブな感情への遭遇(友達との喧嘩／人 が落ち込んでいる／怒られたとき／葬式)	49 (+0.08)	7 (0.08)
I 関係性	認知的不協和、多面性の不調和(先輩Aと先輩Bの指導内容が違う とき、どっちが正しいかわからなくて戸惑う)	12 (+0.36)	3 (0.36)
J 感情のズレ	気持ちと言動のズレ(回答なし)	18(-)	0(+)
K 性・恋愛	性的な対象への注目、恋愛感情を含む関係性(異性の好みのタイ プを聞かれて「人に言ってもいいのかな」と思い気まずい)	21 (0.47)	1 (+0.47)
L 図々しい	図々しい(回答なし)	22(-)	0(+)

⁺p<.1.0

※ () 内は対数線形モデル分析においてモデルを当ては
 めたときの連関項の推定値を示す

まず、「字義どおり」「感情のズレ」「図々
 しい」などのカテゴリに分類される回答が、
 ASD 者の場合には皆無であったことが注目に
 値する。このことは、ASD 者がこれらの場面
 に対する「気まずさ」を感じにくいことを意
 味しているといえる。ASD 者が他者と同じ場
 面を体験し、相手がこれらのカテゴリに基
 づくような心情を体験していたとしても、
 ASD 者はその相手の心情に配慮した形で場面
 を記憶しにくいことが示唆される。

次に、ASD 者は「不都合」に関する「気ま
 ずさ」を認識しやすいことが明らかにされた。
 このことは、「聞きたいのに聞けない」「わか
 らないのにわからないと言えない」など、自
 分自身ができないことやわからないこと、苦
 手なことなどについて、それを相手に表出し
 にくいと感じる体験の多さを示しているとい
 えるだろう。今回対象とした ASD 者の多くが、
 思春期・青年期に属していることから、学
 校での勉強や、職場での技術など、指導さ
 れる場面を日常的によく体験し、その中で自
 分自身の能力に対する評価を受ける体験も
 多く積み重ねてきていることが推察される。
 そのような環境の中で、他者に対して指導を
 仰いだり、自分自身のわからなさを表出し
 たりするなどの発信に対する抵抗があること
 がうかがわれた。

その他、年齢群と障害の有無との交互作用
 がなかったことから、ASD 者と定型発達者との
 間で、「気まずさ」の認識について明確な
 発達差があるとはいえない。また、今回の結
 果から、ASD 者は社会的失言 (Faux Pas) を

「気まずさ」として認識しにくいとはいえな
 いことが明らかにされた。このことは、先行
 研究 (Baron-Cohen, et al., 1999) の知見
 に合致しない。これらに関して、さらなる
 検討の余地があるといえるだろう。

今後の検討課題として、ASD 者の対象者、
 特に、小中学生を追加したデータの分析が必
 要である。また、「不都合」に関する「気ま
 ずさ」を認識しやすい特徴についても、学業
 や就労場面で自分自身のできなさを認識し
 やすい高校生以上の ASD 者ならではの特
 徴なのかどうか、更なる検討が必要である。
 加えて、今後は、ASD 者における「気ま
 ずさ」の認識の違いに関する発達の様相を
 検討することも課題である。

以上の結果をもとに考えられる ASD 者に対
 する臨床的支援として、以下のことがあげら
 れる。まず、ASD 者は「気まずさ」全般を認
 識できないわけではない、という意識を、か
 かり手がもつことが重要である。そのうえ
 で、ASD 者にとってなかなか認識されにくい
 「気まずさ」(字義通り・感情のズレ・図々
 しい)については、具体的な場面に基きわ
 かりやすく説明し理解を促すこと、認識し
 やすい「気まずさ」(「不都合」)については、
 過度に自尊心が低下しないよう配慮するこ
 とが必要であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
 は下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

1. 滝吉美知香・田中真理, 思春期・青年期
 の広汎性発達障害者における自己理解, 査
 読有, 発達心理学研究, 第 22 巻第 3 号,
 2011 年, pp215-227
2. 滝吉美知香・田中真理, 自閉症スペク
 トラム障害者の自己に関する研究動向と課
 題, 査読無, 東北大学大学院教育学研究科
 研究年報, 第 60 巻第 1 号, 2011 年, pp497-521
3. 田中真理・小牧綾乃・滝吉美知香・渡邊
 徹, 小学校の特別支援教育コーディネー
 ターにおける「内的調整」機能に関する研究,
 査読有, 特殊教育研究, 第 49 巻第 1 号,
 2011 年, pp361-369
4. 滝吉美知香・田中真理 発達障害者と
 ともに生きるナチュラルサポーターの育成
 をめざして—思春期・青年期の定型発達者
 における発達障害および自己に対する理
 解の変化—, 査読無, 東北大学大学院教育
 学研究科研究年報, 第 59 巻第 2 号, 2011

年, pp167-192

5. 滝吉美知香・田中真理 自己理解の視点からみた広汎性発達障害者の集団療法に関する先行研究の動向と課題, 査読無, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第 58 巻第 2 号, 2010 年, pp189-212

〔学会発表〕(計 13 件)

1. 滝吉美知香・鈴木大輔・斎藤維斗・田中真理, 人はどのような場面に「気まずさ」を感じるか—自閉性スペクトラム障害者における特徴—, 日本発達心理学会第 23 回大会, 2012 年 3 月 9 日, 名古屋
2. 滝吉美知香・永瀬 開・李 熙馥・田中真理・佐藤健太郎・横田晋務・松崎 泰・小口万梨子・栗田裕生, 自閉性スペクトラム障害者は笑いやユーモア状況をいかに楽しむか, 日本特殊教育学会第 49 回大会, 2011 年 9 月 24 日, 弘前
3. 佐藤健太郎・滝吉美知香・松崎 泰・星 恵美・三浦祐樹・田中真理, 高機能自閉症者の自己理解と心理劇的ロールプレイングにおける反応様式との関連, 第 36 回西日本心理劇学会大会, 2011 年 2 月 20 日, 那覇
4. 滝吉美知香, 特別支援教育において共生社会を生きる人材をいかに育成するか—ナチュラルサポーターの育成と支援—(自主シンポジウム話題提供), 日本特殊教育学会第 48 回大会, 2010 年 9 月 19 日, 長崎
5. 滝吉美知香・斎藤維斗・田中真理, 自閉症スペクトラム障害児・者における「気まずさ」の心情理解に関する研究, 日本特殊教育学会第 48 回大会, 2010 年 9 月 18 日, 長崎

〔図書〕(計 1 件)

1. 田中真理ほか, KOBAYASHIKEN 東北大学大学院教育学研究科, 「自己理解・他者理解のためのグループワーク」東北大学大学院教育学研究科, 2010 年, 30 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

滝吉 美知香 (TAKIYOSHI MICHIKA)

東北大学・大学院教育学研究科・博士研究員

員

研究者番号: 00581357

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし